

中2の苦い思い出 ～K君のこと～

いのちの校長講話

中学2年の時、クラス替えがあり、私の隣の席に座ったのがK君でした。小学校も違っていたので、初めて話をしました。すらりと背が高く、かっこいいけど、シャイで物静かな少年でした。私たちは、なぜか気が合う仲の良い友だちでした。



毎週土曜日は、給食がないのでお弁当でした。K君は、その日も、しかたなさそうに、カバンの中から、くしゃくしゃの茶色い紙袋を机の上に出しました。中身を見ると菓子パンが2つと小さな缶詰が一つ。それがK君のお弁当でした。K君は訳あって、お父さんと二人暮らしです。長距離トラックの運転手をしていたお父さんは、3日に一度しか帰ってこないのだそうです。K君は寂しそうに、ぼつりとそう話してくれました。それを知ってから、私たちは、いつも私の弁当のおかずを二人で分け合って食べるようになっていました。(中でもあるとき食べた「やきとりの缶詰」は、とりわけ美味しかったことを今も覚えています。)

それから少し経った休み時間のこと。私が階段の曲がり角のところで、肩がぶつかったことが原因で、違うクラスの柄の悪そうな二人組に絡まれたことがありました。偶然通りかかったK君が、その二人組の大きい方に向かって「おい！止めろよ！」と言ってくれたのです。今まで聞いたこともないドスのきいた低いK君の声と、見たこともないような鋭い目つきです。二人組は、しっぽを巻いて去っていきました。「ありがとうK君。おかげで助かったよ。」と言うとK君は、にっこり微笑んで、またいつものやさしい表情に戻っていました。

それから2、3ヶ月が過ぎ、K君は、上級生の不良グループと一緒にいるようになっていました。K君もいつしか2年生では、一番の「顔」になっていました。授業にもほとんど出なくなり、学校で見かけることも少なくなっていました。それでも、たまに学校に登校すると、私には笑顔で声をかけてくるK君でした。しかし、どんどん悪い方に走っていくK君に対し、しだいに私は声をかけることさえできなくなっていました。

その後、K君が「少年鑑別所」に入ったといううわさを聞いたのは、私が転校する少し前のことでした。

Q あの頃、友だちK君を助けられなかった自分を少し後悔しています。どんどん悪くなっていくK君に対して、私に何かできることはなかったのでしょうか。中学2年生の私に、みなさんからアドバイスをお願いします。

